ヒューマン・ケア研究　第10巻　第２号
2009年11月　87-100頁

Journal of Human Care Studies Vol. 10 No. 2
November 2009, pp 87-100

原　著

青年用主観的ウェルビーイング指標（AI-SWB）の作成：因子構造、信頼性、および横断的検討

鈴木　有美*

Development of the Adolescents' Index of Subjective Well-Being (AI-SWB): Its factor structure, test reliability, and developmental differences in adolescence

Yumi Suzuki*

Abstract

In recent studies of positive psychology, subjective well-being is regarded as one of the major perspectives on mental health. Two studies describe the development and psychometric properties of a multidimensional measure of adolescents' subjective well-being; the Adolescents' Index of Subjective Well-Being (AI-SWB). In the first study, the AI-SWB was administered to a sample of 783 undergraduates. Preliminary examination demonstrated a 4-factor solution of a measure of *life satisfaction* and a 6-factor solution of a measure of *emotional experience*, which could distinctively assess the cognitive/affective components of subjective well-being. In addition, this index was shown to be highly internally consistent and stable at appropriate levels over a 6-month time period. In the second study, factor analyses confirmed the same factor structure of the AI-SWB among 201 junior-high, 178 senior-high, and 193 university students, although their mean scores on a number of subscales were significantly different. Discussed are some issues for future research in terms of each important domain of adolescents' well-being.

Key words: subjective well-being, life satisfaction, positive/negative affect, multidimensional scale, adolescence.

問　題

従来の青年期における精神的健康に関する研究では、損なわれた心的機能の治療という観点から、無気力感やストレス認知・反応・対処など否定的側面に焦点が当てられることが多かった。しかし、いかに精神的に不健康かという視点から検討されるだけでは、精神的健康概念の全体像を把握することはできない上、臨床・教育現場への予防的・開発的な提言という面からも限界がある。そのため、Seligman & Csikszentmihalyi（2000）が健康な心的機能の維持や才能・資質を伸ばすといった肯定的側面に焦点を当てるポジティブ心理学を提唱して以降、この動きは日本でも活発になりつつある（島井, 2006）。本研究で取り上げる主観的ウェルビーイング（Subjective Well-Being: 以下

*　名古屋市立大学人文社会学部（非常勤）（School of Humanities and Social Sciences, Nagoya City University (part-time)）
受稿2009.7.2　受理2009.10.20

SWBとする）は、このポジティブ心理学において注目を集める概念の一つである。

SWBは、“個人生活の自分自身の評価（Diener, 2000, p.34）”と定義され、認知的・情緒的側面に分類される概念であり、認知的側面として‘全体的な生活満足感’と‘特定の重要な領域における満足感’、情緒的側面として‘快感情経験の多さ’と‘不快感情経験の少なさ’の四つの基本的要素からなる。従来の研究では、快感情を多く経験したか、あるいは不安・抑うつ傾向がないか（不快感情を経験していないか）のみによって議論されることも多かったが、現在では快感情と不快感情は独立であり、生活満足感は感情経験と弁別される概念であるとの考え方が優勢である（Lucas, Diener, & Suh, 1996; Pavot, Diener, Colvin, & Sandvik, 1991）。そのため、両側面を質問紙調査などで同時に測定することが多い。

認知面の測定に最も利用されることの多いSWLS（Satisfaction With Life Scale; Diener, Emmons, Larson, & Griffin, 1985）は、既存尺度との収束的妥当性（Pavot et al., 1991）および自尊感情や楽観性など類似概念との弁別的妥当性（Lucas et al., 1996）が報告されている全5項目からなる利便性の高い尺度である。しかし‘全体的な生活満足感’を測定するに留まっている点や、「これまで私が生活で望んだ重要な物は手に入れてきた」「もしもう一度人生をやり直せるとしても何も変えたいとは思わない」といった青年が評定するのを躊躇する項目が含まれる点などに留意する必要がある。上述のようにSWBには‘特定の重要な領域における満足感’も構成要素として含まれるため、例えば成人を対象とする場合は日常全般における生活満足感に加えて仕事や結婚生活における満足感も取り上げられることがある（Heller, Watson, & Ilies, 2004）。従って、青年の生活満足感を測定する際には、この年代における重要領域を想定して項目を用意し、全般的な生活満足感についても適切な項目を選択することで、構成概念にも対応し、青年に適した評価を行える可能性がある。

少なくとも日本においては、青年期における重要な意味を持つ領域として学校生活、友人関係、および家族関係が挙げられよう。義務教育である中学校はもちろん、高等学校進学率が97.9%（専修学校高等課程を含めて98.1%）、さらに大学進学率も53.9%（専修学校専門課程を含めて68.6%）と過去最高を記録している現在（文部科学省, 2009）、学校生活は現代青年の生活の中心であると想定できる。また、他者との関係性はSWBに欠くことのできない充足すべき欲求の一つであり（Ryan & Deci, 2001）、学校適応に関する研究においても、学校への適応感・不適応感の規定要因に学業に加えて友人関係や家族関係を挙げるものがみられる（例えば、古市, 2004）。従って、友人および家族関係を青年期における重要な対人関係領域として選択することは妥当であると考えられる[註1)]。

一方、情緒面の測定にしばしば利用されるPANAS（Positive and Negative Affect Scale; Watson, Clark, & Tellegen, 1988）については、構成している快・不快感情各10項目に「うれしい」「悲しい」といった直接的な表現が含まれないことに留意する必要がある。やや使いにくさが感じられるためか、研究者が独自に感情を表す形容詞リストを用意する場合も多いが、リストは8項目（Pavot et al., 1991）から16項目（Elliot, Sheldon, & Church, 1997）まで研究によって幅があり、選択される形容詞も異なるため、知見を比較検討する際には注

註1）なお、多次元的な生活満足感尺度としてはHuebner（1994）が小・中学生用に作成した尺度が存在し、家族関係、友人関係、自己概念、学校生活、近隣・住宅環境の5下位尺度から構成されている。しかし、自己概念については自尊感情と類似の項目からなり、自尊感情が生活満足感とは異なる（Lucas et. al., 1996）ことはHuebner自身も認めている。また、近隣・住宅環境については少なくとも現在の日本青年の生活満足感に大きく影響する要因とは考えにくい。従って、尺度利用の簡便性も考慮し本研究ではこれら2下位概念は含めていない。

意を要する。この問題に対する一つの解決案は、SWBの認知面（生活満足感）と情緒面（感情経験）を測定するための尺度を1セットにした指標を提供することであろう。

従って、本研究ではSWBの認知面として全般的生活満足感に加えて学校生活満足感、友人関係満足感、家族関係満足感をたずねる生活満足感尺度、および情緒面として学業、友人関係、家族関係の3領域に適用できる形容詞を選択して快・不快感情の経験頻度をたずねる感情経験尺度を作成し、その尺度構成および信頼性（内的整合性）を検討する。また、情緒面に比べ持続的な傾向をもつとされる認知面（Lucas et. al., 1996）については、安定性からみた信頼性も検討する。そして、中学生から大学生までを対象として両側面の因子構造および尺度得点の相違を比較し、青年期全般に対する適用可能性を検討することを目的とする。

研究1

目　的

青年期におけるSWBを多次元的に測定する青年用主観的ウェルビーイング指標（Adolescents' Index of Subjective Well-Being: AI-SWB）を作成し、その尺度構成および信頼性を検討することを目的とする。

方　法

調査対象と手続き　愛知県内の五つの四年制大学に通う学生783名（男子373名、女子410名; M＝19.45歳, SD＝1.21）に対して、2006年4月から2007年12月の間に質問紙調査を実施した。倫理的配慮として、調査用紙の表紙に調査の目的は一般的な傾向を研究するために行うものであること、データは統計的に処理されるため個人の回答が特定されることはない旨を明記し、配付する際に調査結果を研究目的以外に使用しないこと、自由意志による参加のため非協力による不利益を一切被らないことを口頭で伝え、無記名式で回答を求めた。調査用紙は、各自が自宅へ持ち帰って回答し、後日回収された。

測　度　AI-SWBは、認知面を測定する生活満足感尺度と、情緒面を測定する感情経験尺度から構成される。生活満足感尺度の項目は、既存の満足感や適応感を測定する尺度（古市・玉木, 1994; Huebner, 1991, 1994; 黒川, 1990など）から項目プールを作成し、生活全般・学校生活・友人関係・家族関係それぞれにおいてなるべく幅広く測定できるよう6項目ずつ選定した。それらについて文章表現を揃えるため、また各領域において2項目ずつ逆転項目を用意するため、若干の改変を行った（Table 1参照）。評定は、どの程度自分自身の感じ方に当てはまるかについて「とてもよくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階で求めた。同様に、感情経験尺度の項目も既存の感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木, 2000など）および過去のSWB研究において用いられた感情を表す形容詞リスト（Elliot et al., 1997など）から学業・友人関係・家族関係の3領域において共通に適用できる快・不快を表す形容詞を6項目ずつ選定し、全ての語尾を‘…気持ち’とした（Table 2参照）。評定は、過去3ヶ月の間に各領域でそれぞれどの程度経験したかについて「とてもよく感じた」から「全く感じなかった」までの5段階で求めた。

結果[註2)]と考察

尺度構成　まず、生活満足感尺度について因子分析を行った。主成分解を初期解として、その固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から4因子解を採用し、プロマックス回転を行った。その結果、第1因子は家族関係満足感、第2因子は全般的生

註2）以下、確認的因子分析にはAMOS（version 6）、それ以外の分析にはSPSS（version 14.0 J）を利用した。

活満足感、第 3 因子は友人関係満足感、第 4 因子は学校生活満足感と、当初想定していた下位概念を測定する項目群がそれぞれ因子としてまとまった（Table 1）。

次に、感情経験尺度についても同様に因子分析（主成分解・プロマックス回転）を行い、6 因子解を採用した。その結果、第 1 因子は快感情の多さ（家族）、第 2 因子は快感情の多さ（友人）、第 3 因子は不快感情の少なさ（友人）、第 4 因子は快感情の多さ（学業）、第 5 因子は不快感情の少なさ（家族）、第 6 因子は不快感情の少なさ（学業）と、感情の評価値および領域別に想定していた項目群がそれぞれ因子としてまとまった（Table 2）。

下位尺度得点は、生活満足感尺度については評定値が高いほど当該の特性が強いことを示すよう逆転項目の得点処理を行い、各因子を構成する項目の評定値を合計することにより算出した。感情経験尺度については、快感情の下位尺度得点は各因子を構成する項目の評定値の合計点としたが、不快感情に関する因子は得点が高いほど不快感情の経験頻度が高い（すなわち SWB が低い）ことを示すため、逆転項目として得点処理を行ってから算出した。

尺度の信頼性については、α 係数を算出したところ生活満足感尺度で .78〜.88（Table 1）、感情経験尺度で .78〜.92（Table 2）と十分な内的整合性が確認された。また、特性的とされる生活満足

Table 1　生活満足感尺度の因子パターンおよび因子間相関（プロマックス回転解）

		F1	F2	F3	F4
第1因子：家族関係満足感 (α =.88)					
ls12	自分の家族が好きだ。	**.86**	-.03	.08	-.03
ls20	家族と一緒にいると，いごこちが良い。	**.81**	.11	-.05	-.04
ls24 *	よく家族をとりかえてしまいたいという気持ちになる。	**-.79**	.02	.01	.01
ls06	自分は家族に愛されていると感じる。	**.76**	.01	.08	-.02
ls16	家族から学ぶことは多い。	**.72**	.04	-.09	.11
ls04 *	家族は私の考えや行動を認めてくれない。	**-.72**	.08	.00	-.06
第2因子：全般的生活満足感 (α =.86)					
ls01	私の毎日は充実している。	-.08	**.88**	-.13	.09
ls19	私は自分の生活に満足している。	-.02	**.86**	.04	-.08
ls21	今の生活には楽しいことがたくさんある。	-.01	**.73**	.14	.04
ls14	この先たくさんのいいことが起こると思う。	.03	**.66**	.07	-.04
ls11 *	今の生活はたいくつだ。	.04	**-.66**	.07	-.23
ls07 *	自分が生きていることの意味をみいだせない。	-.20	**-.59**	.05	.01
第3因子：友人関係満足感 (α =.79)					
ls02 *	友達といると不愉快になることが多い。	-.08	.21	**-.77**	-.04
ls09	友だちといると楽しい。	.00	.04	**.77**	.12
ls23	友だちには感謝している。	.05	-.06	**.75**	.04
ls05	今の友人関係に満足している。	-.04	.21	**.65**	-.02
ls15 *	友だちといるより，ひとりでいる方が気楽だ。	.11	.04	**-.61**	-.04
ls18	これまで，あたたかく信頼できる友人関係を作ってきた。	.06	.31	**.58**	-.23
第4因子：学校生活満足感 (α =.78)					
ls22 *	学校にいるのは時間のムダだと感じる。	-.01	.19	-.08	**-.88**
ls17 *	学校がつまらない。	.10	-.11	-.08	**-.75**
ls13	学校で過ごす時間が好きだ。	-.02	.02	.17	**.70**
ls03	学校での経験は，将来の生活や職業に役に立つと感じる。	.15	.06	-.17	**.63**
ls08	これまで学校で学んできたことに満足している。	.06	.32	-.11	**.46**
ls10	学校の先生に対して親しみを感じる。	.01	.11	.01	**.42**
因子間相関					
	F2　全般的生活満足感	.40			
	F3　友人関係満足感	.33	.50		
	F4　学校生活満足感	.22	.53	.40	

注. *は逆転項目を示す。

感尺度について大学生140名（男子89名、女子51名; M＝19.84歳, SD＝1.01）を対象に約６ヶ月の間隔をおいた再検査を行ったところ、学校生活満足感（r＝.77）、友人関係満足感（r＝.70）、家族関係満足感（r＝.80）、全般的生活満足感（r＝.78）全てに0.1%水準で有意な値が得られ、十分

Table 2　感情経験尺度の因子パターンおよび因子間相関（プロマックス回転解）

		F1	F2	F3	F4	F5	F6
第1因子：快感情の多さ(家族) (α =.92)							
fa04	楽しい気持ち	**.89**	.00	.00	-.01	.08	-.03
fa06	面白い気持ち	**.86**	-.02	-.03	-.04	.12	-.03
fa08	充実した気持ち	**.85**	-.03	-.03	.04	.08	-.01
fa01	うれしい気持ち	**.81**	.07	.04	.04	-.04	.01
fa02	満足な気持ち	**.80**	.10	.05	.06	-.07	.01
fa10	安心した気持ち	**.72**	.08	.11	-.03	-.14	.06
第2因子：快感情の多さ(友人) (α =.91)							
fr04	楽しい気持ち	-.03	**.89**	.04	-.07	-.03	.00
fr01	うれしい気持ち	.00	**.85**	.01	.04	.00	.00
fr06	面白い気持ち	.02	**.83**	.00	-.07	-.04	.02
fr02	満足な気持ち	.07	**.80**	-.04	.06	.02	-.02
fr08	充実した気持ち	.03	**.79**	-.06	.05	-.02	-.02
fr10	安心した気持ち	.07	**.73**	-.08	.01	.07	.01
第3因子：不快感情の少なさ(友人) (α =.87)							
fr12 *	腹立たしい気持ち	.01	-.05	**.83**	.07	-.12	.04
fr03 *	いらいらした気持ち	-.01	.00	**.80**	.08	-.11	.05
fr09 *	憂うつな気持ち	.00	-.06	**.77**	-.02	.06	-.01
fr07 *	悲しい気持ち	.06	.03	**.76**	-.04	.11	-.04
fr11 *	満たされない気持ち	-.01	-.15	**.71**	.01	.04	.01
fr05 *	心配な気持ち	.09	.10	**.69**	-.07	.12	-.05
第4因子：快感情の多さ(学業) (α =.85)							
ac08	充実した気持ち	-.01	.02	-.10	**.82**	-.04	.06
ac02	満足な気持ち	.01	-.02	.00	**.82**	-.05	-.03
ac01	うれしい気持ち	.01	-.02	.00	**.81**	.02	.00
ac04	楽しい気持ち	.00	.09	.05	**.77**	-.01	.00
ac06	面白い気持ち	.04	.08	.07	**.69**	.08	.02
ac10	安心した気持ち	-.01	-.13	.05	**.65**	.04	-.09
第5因子：不快感情の少なさ(家族) (α =.85)							
fa07 *	悲しい気持ち	.18	-.11	-.06	.00	**.89**	-.01
fa09 *	憂うつな気持ち	-.10	-.01	.03	.03	**.79**	.00
fa05 *	心配な気持ち	.31	-.10	-.05	-.04	**.72**	.05
fa11 *	満たされない気持ち	-.15	-.02	.04	.04	**.71**	-.02
fa12 *	腹立たしい気持ち	-.23	.17	.12	.02	**.63**	.02
fa03 *	いらいらした気持ち	-.24	.21	.08	.00	**.61**	.02
第6因子：不快感情の少なさ(学業) (α =.78)							
ac12 *	腹立たしい気持ち	-.01	-.08	.05	.04	-.02	**.78**
ac03 *	いらいらした気持ち	-.08	.07	.11	.04	-.16	**.74**
ac07 *	悲しい気持ち	.05	-.14	-.19	.11	.19	**.70**
ac09 *	憂うつな気持ち	.03	.04	.02	-.10	.09	**.66**
ac05 *	心配な気持ち	-.02	.10	-.03	-.02	-.03	**.64**
ac11 *	満たされない気持ち	.05	.00	.07	-.16	.05	**.51**
因子間相関							
	F2　快感情の多さ(友人)	.39					
	F3　不快感情の少なさ(友人)	-.12	-.23				
	F4　快感情の多さ(学業)	.22	.26	.02			
	F5　不快感情の少なさ(家族)	-.36	-.07	.43	.03		
	F6　不快感情の少なさ(学業)	-.05	-.02	.34	-.24	.29	

注. 不快感情項目は，評定値が高いほど主観的ウェルビーイングが低いことを表すため，*が付してある。

な再検査信頼性も確認された。

性　差　各下位尺度得点についてt検定を行った（Table 3）。生活満足感については、学校生活満足感（$t(776)=-4.63$, $p<.001$）、友人関係満足感（$t(774)=-3.24$, $p<.01$）、家族関係満足感（$t(775)=-2.49$, $p<.05$）、全般的生活満足感（$t(774)=-4.42$, $p<.001$）全てにおいて男女差が認められ、いずれも女子の方が高かった。感情経験については、快感情の多さ（友人）（$t(749)=-3.55$）および快感情の多さ（家族）（$t(727)=-3.83$）は女子の方が0.1%水準で有意に高く、逆に不快感情の少なさ（友人）（$t(759)=2.29$）および不快感情の少なさ（家族）（$t(738)=2.06$）は男子の方が５%水準で有意に高かった。学業領域では快感情（$t(756)=0.23$）にも不快感情（$t(757)=1.75$）にも有意差はみられなかった。

女子の方が友人・家族関係における快感情の経験頻度が高く、それらの関係や日常生活に満足しているという結果から、少なくとも女子青年にとって身近な他者との良好な関係性がSWBに欠かすことのできない要因であることが窺える。男子の方が友人・家族関係における不快感情の経験頻度が低いという結果は、それほど顕著な差ではないため本研究における分析対象者の多さによるものとも考えられるが、通常積極的な社会的相互作用は快感情だけでなく不快感情を経験する可能性も上げるため、快感情の経験頻度も低いことを考え併せれば、友人や家族との相互作用自体が女子に比べて少ないのかもしれない。実際、総務庁青少年対策本部（2004）が行った調査では、同性の親しい友人がいるとの回答は女子の方が多く、親しい友人はいないとの回答は男子の方が多いという有意差がみられる。また、家庭生活で満足しているのは家族の団欒やきょうだいと気が合うことであるとの回答も女子の方が多い。ただし、単一項目による結果とはいえ友人関係満足度や家庭生活満足度に性差はみられず、相互作用量が直ちに満足感に影響するわけではないことも示唆される。充実していると感じるのは友人や家族といるときであるとの回答も女子の方が多いと報告されており、対人欲求やその充足の程度など関係のあり方の違いを視野に入れて検討を重ねる必要があろう。

下位尺度間の関連　学業における感情経験以外で性差が認められため、男女別に相関係数を算出し分析を行った（Table 4）。男女とも生活満足感（男子$r=.21$〜$.58$, 女子$r=.31$〜$.62$）、快感情（男子$r=.26$〜$.44$, 女子$r=.22$〜$.42$）、不快感情（男子$r=.29$〜$.52$, 女子$r=.33$〜$.38$）全ての下位尺度間に0.1%水準で有意な正の相関関係がみられた。全般的生活満足感が学校生活満足感、友人関係満

Table 3　生活満足感および感情経験下位尺度得点の性差

	男子 N=373		女子 N=410		t	
	M	(SD)	M	(SD)		
生活満足感						
学校生活	20.04	(4.27)	21.46	(4.27)	-4.63	***
友人関係	22.67	(3.97)	23.57	(3.82)	-3.24	**
家族関係	22.95	(4.96)	23.85	(5.02)	-2.49	*
全般生活	20.09	(5.13)	21.69	(4.97)	-4.42	***
快感情の多さ						
学業	16.28	(4.72)	16.20	(4.64)	0.23	
友人	23.03	(4.58)	24.23	(4.72)	-3.55	***
家族	19.52	(5.21)	21.07	(5.67)	-3.83	***
不快感情の少なさ						
学業	16.91	(4.67)	16.31	(4.87)	1.75	
友人	21.02	(5.20)	20.16	(5.15)	2.29	*
家族	21.29	(5.27)	20.48	(5.40)	2.06	*

注. *$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

足感、家族関係満足感の順に高い関連を示す傾向は、男女ともに認められた（順に、男子r=.58, .50, .40, 女子r=.62, .61, .42）。特定領域における満足感と当該の感情経験の間は、学校生活満足感と快感情の多さ（学業）（男子r=.49, 女子r=.34）および不快感情の少なさ（学業）（男女ともr=.27）、友人関係満足感と快感情の多さ（友人）（男子r=.65, 女子r=.71）および不快感情の少なさ（友人）（男子r=.49, 女子r=.38）、家族関係満足感と快感情の多さ（家族）（男子r=.67, 女子r=.74）および不快感情の少なさ（家族）（男子r=.49, 女子r=.59）と全てに0.1%水準で有意な関連を示した。同一領域における快感情と不快感情の間は、学業（男子r=.20, 女子r=.30）、友人関係（男子r=.27, 女子r=.29）、家族関係（男子r=.30, 女子r=.43）全てに0.1%水準で有意な相関関係がみられる一方、ある領域における快感情と異なる領域における不快感情とは女子データでは無相関であり、男子データでも絶対値が.14を超える相関係数はなく関連しないとみなせる程度であった。

構成概念の基本的要素の一つである‘全体的な生活満足感’を測定するための全般的生活満足感は、学校生活、友人関係、家族関係それぞれの領域における満足感と相対的に高い正の相関関係を示しており、‘特定の重要な領域における満足感’としてこれらの下位尺度を設定したことは有効であったと考えられる。認知面と情緒面の関連については、各領域における満足感が当該の不快感情より快感情と関連が高く、なるべくネガティブな経験をしないことよりポジティブな経験をすることの方が満足感を得るために重要であることが示された。全般的生活満足感は、友人・家族関係における快感情経験との関連が顕著であった。なお、女子に限っては学校生活満足感が快感情の多さ（友人）とr=.51(p<.001）という快感情の多さ（学業）との間以上の関連を示した。学校適応の規定因としては学業よりも友人関係の影響力が強く（大久保, 2005）、この傾向は特に女子において顕著である（古市 2004）との知見もあり、先の分散分析の結果も考え併せれば、女子にとっては友人とのポジティブな経験が比較的長時間を過ごす学校において満足感を左右するといえよう。学業領域の快・不快感情経験に性差がみられなかったにも関わらず女子の学校生活満足感の方が高かった結果についても、この下位尺度が主に学校で過ごすことについてたずねる項目から構成されており、学業のみが関わるとは限らないためと考えられるが、友人関係領域における満足感や快感情経験の性差が間接的に影響しているのかもしれない。

研究 2

目　的

研究 2 では、研究 1 で作成した AI-SWB を中学生から大学生までを対象に実施し、因子構造と尺

Table 4　生活満足感および感情経験下位尺度間相関（男子＼女子）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 学校生活満足感		.56 ***	.31 ***	.62 ***	.34 ***	.51 ***	.29 ***	.27 ***	.24 ***	.19 ***
2 友人関係満足感	.43 ***		.39 ***	.61 ***	.09	.71 ***	.36 ***	.10 *	.38 ***	.23 ***
3 家族関係満足感	.21 ***	.27 ***		.42 ***	.10 *	.31 ***	.74 ***	.17 ***	.22 ***	.59 ***
4 全般的生活満足感	.58 ***	.50 ***	.40 ***		.22 ***	.53 ***	.41 ***	.23 ***	.32 ***	.29 ***
5 快感情の多さ(学業)	.49 ***	.10 *	.13 *	.41 ***		.25 ***	.22 ***	.30 ***	.05	.00
6 快感情の多さ(友人)	.43 ***	.65 ***	.25 ***	.51 ***	.29 ***		.42 ***	-.04	.29 ***	.10
7 快感情の多さ(家族)	.24 ***	.25 ***	.67 ***	.44 ***	.26 ***	.44 ***		.06	.06	.43 ***
8 不快感情の少なさ(学業)	.27 ***	.22 ***	.15 ***	.30 ***	.20 ***	.13 *	.07		.33 ***	.35 ***
9 不快感情の少なさ(友人)	.21 ***	.49 ***	.22 ***	.24 ***	-.12 *	.27 ***	.14 *	.38 ***		.38 ***
10 不快感情の少なさ(家族)	.06	.23 ***	.49 ***	.21 ***	-.10	.08	.30 ***	.29 ***	.52 ***	

注. * p < .05　*** p < .001

度得点を横断的に検討することを目的とする。

方　法

調査対象と手続き　愛知県中心部に位置する公立S中学校1―3年生201名（男子105名、女子96名; M=13.20歳, SD=0.96）、公立S高等学校1―3年生178名（男子83名、女子95名; M=16.02歳, SD=0.95）、および私立C大学1―4年生193名（男子94名、女子99名; M=20.03歳, SD=1.47）に対して、2008年11月から2009年6月の間に授業時間を利用してAI-SWBを実施した。その際、研究1と同様に倫理的配慮として調査目的およびプライバシー保護を調査用紙の表紙に明記し、個人の評価等には関係しない旨を口頭で伝え、無記名式で回答を求めた。

結果と考察

尺度構成　中学生・高校生・大学生別に、研究1と同様に下位尺度得点を算出した。α係数は中学生データで.71～.87、高校生データで.77～.91、大学生データで.73～.89と、十分な内的整合性が確認された。

因子構造　大学生を対象とした研究1において探索的因子分析により見出された因子構造が、中学生および高校生のデータでも同様にみられるか検討するため多母集団同時分析を行った。まず、生活満足感について設定したモデルをFigure 1に示す。各集団においてモデルの適合が良好であることを確認し、全集団に共通する修正指数もみられなかったことから、このモデル構成のまま3集団における因子不変性を検討することとした。等値制約を置かず、全てのパラメータが集団間で異なると仮定するモデルAから順に、潜在変数から観測変数へのパス係数に等値制約を置くモデルB、加えて潜在変数の分散にも等値制約を置くモデルC、さらに誤差分散にも等値制約を置き、全てのパラメータが集団間で異ならないと仮定するモデルDまで4つのモデルを設定し、各モデルに対する主な適合度指標の算出およびモデル比較のため等値条件の検定を行った。その結果、モデルAで$\chi^2(6)$=12.32(p=.06), GFI=.99, AGFI=.94, CFI=.99, RMSEA=.066とモデルの適合が良好であることが示され、モデルBでは$\chi^2(12)$=16.60(p=.17), GFI=.98, AGFI=.96, CFI=.99, RMSEA=.028と適合度が向上した。モデルCでも$\chi^2(14)$=19.97(p=.13), GFI=.98, AGFI=.96, CFI=.99, RMSEA=.029、モデルDでも$\chi^2(22)$=30.63(p=.10), GFI=.97, AGFI=.96, CFI=.98, RMSEA=.028と同様の結果が示された。各モデルに対する等値条件の検定結果はいずれも有意でなかったものの、AICおよびBCCの情報量基準の減衰状況（順に、AIC=60.32, 52.60, 51.97, 46.63, BCC=61.82, 53.72, 52.97, 47.13）を考え併せれば、モデルの因子不変性が認められる結果といえよう。

次に、感情経験について設定したモデルをFigure 2に示す。生活満足感の場合と同様に、各集団においてモデルの適合が良好であることを確

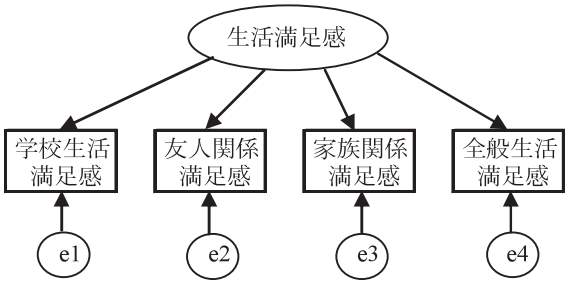

Figure 1　生活満足感のパス図

認した上で4つのモデルを設定し、3集団における因子不変性の検討を行った[註3)]。各モデルに対する主な適合度指標は、モデルAで$\chi^2(24)=93.32$(p<.01)，GFI=.94，AGFI=.85，CFI=.89，RMSEA=.076、モデルBで$\chi^2(32)=101.46$(p<.01)，GFI=.94，AGFI=.88，CFI=.89，RMSEA=.066、モデルCで$\chi^2(38)=109.28$(p<.01)，GFI=.93，AGFI=.89，CFI=.89，RMSEA=.061、モデルDで$\chi^2(50)=133.17$(p<.01)，GFI=.92，AGFI=.90，CFI=.87，RMSEA=.058と、特にAGFIやRMSEAの値にモデルの適合度向上が認められた。各モデルに対する等値条件の検定結果でもモデルDが他のモデルと5%水準で有意に異なり（モデルAと$\chi^2(26)=39.85$、モデルBと$\chi^2(18)=31.71$、モデルCと$\chi^2(12)=23.89$)、AICおよびBCCの情報量基準の減衰状況（順に、AIC=171.32, 163.46, 159.28, 159.17, BCC=174.76, 166.20, 161.49, 160.31）もモデルDの適合が良好であることを示しており、因子不変性が確認された。

性差・学校段階差　3集団において両尺度の因子構造がいずれも等質であることが確認されたため、集団間の各下位尺度得点差を検討するため性（2）×学校段階（3）の2要因分散分析を行った（Table 5)。その結果、生活満足感については学校段階の主効果が学校生活満足感（$F(2,527)=7.21$, $p<.001$)、家族関係満足感（$F(2,527)=3.35$, $p<.05$)、全般的生活満足感（$F(2,527)=4.23$, $p<.05$）で認められた。HSD法による多重比較の結果、大学生の学校生活満足感は中学・高校生より

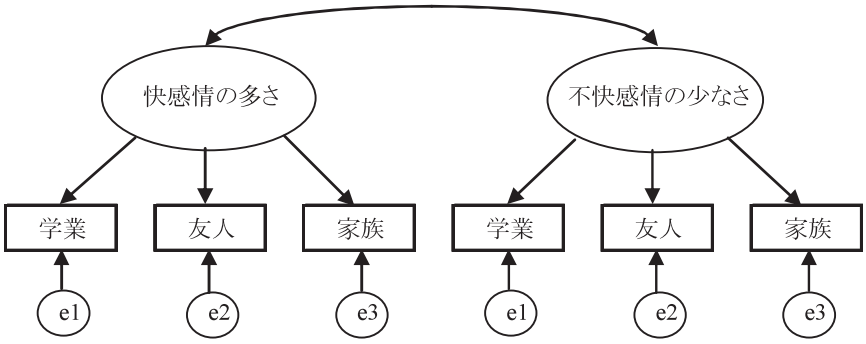

Figure 2　感情経験のパス図

Table 5　生活満足感および感情経験下位尺度得点の性差および学校段階差

	中学生				高校生				大学生						
	男子 N=105		女子 N=96		男子 N=83		女子 N=95		男子 N=94		女子 N=99		性差	学校段階差	性×学校
	M	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*F*	*F*	*F*
生活満足感															
学校生活	20.78	(5.22)	21.37	(4.65) b	20.97	(4.72)	21.36	(4.32) b	18.77	(4.44)	20.21	(4.06) a	3.86	7.21 ***	0.63
友人関係	22.60	(4.30)	23.89	(4.12)	22.68	(4.30)	23.87	(3.44)	23.55	(3.61)	23.13	(4.04)	3.57	0.03	2.40
家族関係	21.90	(4.44)	22.76	(4.69) a	22.89	(4.18)	23.51	(5.06)	23.34	(4.05)	23.79	(4.32) b	2.54	3.35 *	0.09
全般生活	21.39	(3.86)	22.75	(4.64) b	20.96	(5.28)	20.76	(4.87)	20.17	(4.89)	21.24	(4.39) a	3.15	4.23 *	1.27
快感情の多さ															
学業	18.17	(5.52)	18.09	(5.22) b	17.48	(4.85)	16.58	(4.79)	14.98	(5.49)	16.44	(4.36) a	0.13	9.70 ***	2.37
友人	24.09	(4.60)	25.87	(4.48) b	23.06	(5.41)	24.73	(3.89)	24.11	(4.49)	23.35	(4.56) a	4.81 *	3.64 *	4.20 *
家族	22.39	(5.67)	23.82	(5.62) b	21.19	(5.61)	22.18	(5.72)	20.70	(5.54)	20.70	(5.77) a	2.53	7.62 ***	0.71
不快感情の少なさ															
学業	20.04	(4.73)	16.83	(5.01)	18.21	(5.10)	17.56	(5.08)	16.50	(5.31)	18.90	(4.87)	1.18	0.98	13.21 ***
友人	20.76	(4.92)	19.47	(6.02)	21.32	(4.83)	19.09	(6.02)	19.90	(5.71)	20.57	(5.40)	3.70	0.02	3.02
家族	20.07	(5.03)	18.46	(6.19)	21.03	(4.78)	19.86	(5.38)	20.52	(5.47)	20.37	(5.74)	4.01 *	2.58	0.80

注. * p < .05　*** p < .001，a < b (p < .05)

註3）なお、このモデルでは二つの潜在変数を設定しているため、モデルCではモデルBの条件に加えて潜在変数の分散だけでなく共分散にも等値制約を置いた。

も有意に低かった。また、大学生は中学生に比べて全般的生活満足感が低く、逆に家族関係満足感が高かった（Figure 3参照）。

中学・高校生に比べ大学生の学校生活満足感の低さが顕著であった本研究の結果は、学校段階が上がるにつれて学校適応感は高くなると論じる先行研究（大久保, 2005）に反する。ただし、それは中学・高校生よりも大学生の方が学校場面で周囲からの信頼感や受容感を感じているという、いわば対人関係に関わる側面における有意差であり、課題の有益性・目的の自覚や、居心地の良さといった側面について学校段階差はみられない。それでもなお、本研究における低下傾向とは矛盾するものの、これまで中学から大学までを通した学校適応の検討はあまり行われておらず、そもそも何をもって学校に適応しているとみなすかについて統一見解すら得られていない（大対・大竹・松見, 2007）のが現状である。今後、知見を積み重ね検討を進めていく必要があろう。なお、家族関係満足感は学校段階が上がるにつれて高くなる傾向については、中学生よりも大学生の方が親からポジティブな影響を受けており、親との情愛的な絆が強いと認知する傾向（小高, 2008）、親から信頼され、頼りにされていると感じ、親に干渉されることも突き放されることもないと認知する傾向（落合・佐藤, 1996）など、過去の知見に整合的な結果といえる。

感情経験については、性×学校段階の交互作用効果が快感情の多さ（友人）（$F(2,527)=4.20, p<.05$）および不快感情の少なさ（学業）（$F(2,527)=13.21, p<.001$）でみられた。単純主効果検定の結果、快感情の多さ（友人）については、女子のみ中学生が大学生に比べて高く、また中学・高校生に限っては女子の方が高かった。不快感情の少なさ（学業）については、男子では中学生が大学生より高く、女子では大学生が中学生より高かった。また、中学生では男子の方が高く、大学生では女子の方が高かった。この他の下位尺度得点では、性の主効果が不快感情の少なさ（家族）でみられ、男子の方が高かった（$F(1,527)=4.01, p<.05$）。学校段階の主効果は、快感情の多さ（学業）（$F(2,527)=9.70, p<.001$）および快感情の多さ（家族）（$F(2,527)=7.62, p<.05$）で認められた。HSD法による多重比較の結果、いずれも中学生の方が大学生より高かった（Figure 4参照）。

学校段階が上がるごとに快感情経験が減少する傾向がいずれの領域においても顕著であったが、男子の友人関係に限っては有意差が認められなかった。とはいえ、友人関係満足感に学校段階差がみられなかった先の結果を考えれば、女子における減少傾向こそ注目すべきかもしれない。榎本（1999）は、女子の親しい友人との交友活動は学校段階によって異なり、大学女子において中心的な互いの相違点を理解し尊重し合う相互理解活動では女子の友人関係の特徴である親密感がなくなるため、中学女子に顕著な趣味・行動の類似点に重きをおく親密確認活動や高校女子に顕著な他者を入れない絆をつくる閉鎖的活動と同じように信頼感や安心感をもたらすものの、友人にどう思われているかという懸念や不安感も同時にもたらすことを見出している。本研究で示された女子の快感情経験の減少傾向は、中学・高校生でのみ性差（女子＞男子）がみられた結果も考え併せれば、親密で閉鎖的な共行動の減少によるものとも考えられるため、友人関係のあり方や親密性などに着目し、検討を重ねていく必要があろう。なお、学業における快感情経験の減少傾向については学習内容の高度化が関わると推察されるが、不快感情経験が増加する傾向は男子にしかみられず、女子においては快・不快感情経験ともに減少していた。今後、学習動機・意欲の性差などを視野に入れ、発達的に検討していくことで有益な知見を得られるかもしれない。また、家族関係における快感情経験の減少傾向については、関連の深い家族関係

満足感の上昇傾向とは一見矛盾する結果である[註4)]。落合・佐藤（1996）によれば、中学生は親を「干渉する」「外的な危険や害悪から守ってくれる」「困ったときに支援してくれる」と同時に「自分に関心がなく、突き放す」存在であるとみなしているという。もし中学生にこのようなアンビバレントな認知傾向がみられるのならば、家族関係における不快感情経験の家族の評価に与える影響が青年期前期ではことさら大きくなる可能性があり、本研究において中学生の快感情経験頻度が最も高く、不快感情経験に学校段階差がみられなかったにも関わらず、満足感が最も低かったのはその証左といえるかもしれない。他方、大学生の快感情経験が最も少ないにも関わらず満足感が最も高かったのは、感情的な側面からだけでなく理性的な価値判断も考慮して家族の評価を下せるようになった、あるいは先に述べたような親子関係の対等性や精神的な自立に対する家族の許容度の現れかもしれず、青年期前期と後期における様相の違いの相乗効果の可能性も考えられる。家族関係のあり方の違いや発達的な要因などとの関連を検討していくことが今後の課題といえよう。

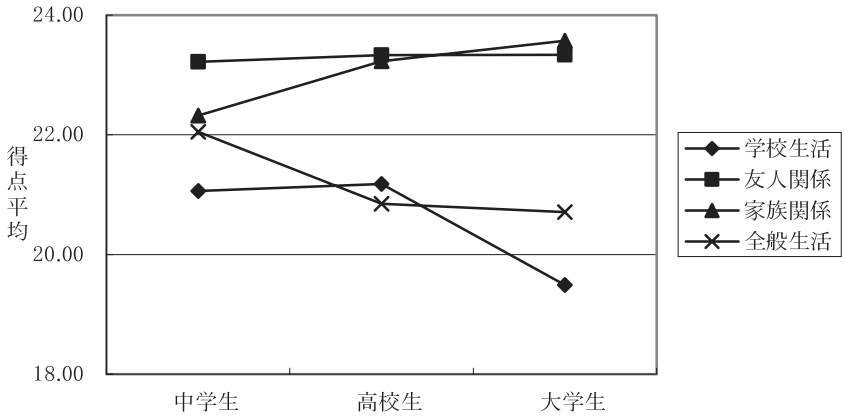

Figure 3　学校段階別の生活満足感下位尺度得点

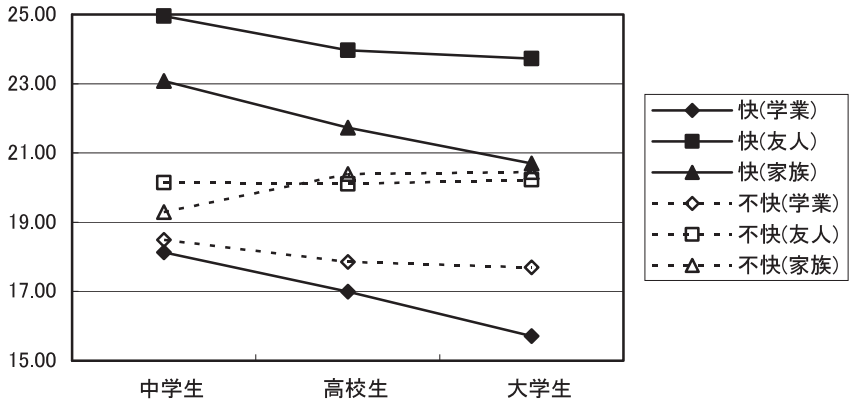

Figure 4　学校段階別の感情経験下位尺度得点

註4）家族関係満足感と快感情の多さ（家族）との間には、r=.67（中学生）, .66（高校生）, .55（大学生）といずれの学校段階おいても0.1%水準で有意な正の相関関係がみられ、研究1に整合的な結果を得ている。なお、この他の相関係数については筆者に請求していただくことにより入手できる。

総合的考察

本研究では、SWBの構成概念の一つである‘特定の重要な領域における満足感’を測定するためには利用対象を特定した上で重要領域を想定する必要があること、既存尺度が測定する‘全体的な生活満足感’についても利用対象に適した項目の選択が望ましいこと、利便性や知見の蓄積のためには‘快感情経験の多さ’および‘不快感情経験の少なさ’という情緒面も併せて測定できる指標の開発が有効であることなどに着目し、青年期におけるSWBを多次元的に測定する尺度を新たに作成してその尺度構成について検討を行った。

探索的因子分析により、認知面では全般的生活満足感、学校生活満足感、友人関係満足感、家族関係満足感の 4 因子、情緒面では快感情の多さ（学業）、快感情の多さ（友人）、快感情の多さ（家族）、不快感情の少なさ（学業）、不快感情の少なさ（友人）、不快感情の少なさ（家族）の 6 因子が想定通り分類された。各下位尺度と尺度全体の構成には、内的整合性および安定性の観点から十分な信頼性が確認され、各下位尺度間および両側面間に整合的な関連がみられるなど、青年のSWBを多面的に理解する上で役立つと考えられる。さらに、それぞれの側面について中学生・高校生・大学生のデータで因子構造が等質であることが確認され、青年期全般における学生を対象に本尺度の利用が可能であることも示された。

各下位尺度得点の性差に関しては、大学生を対象とした研究 1 では学業領域における感情経験を除いて男女差が認められ、女子は男子に比べて全体的な生活満足感や各領域における満足感が高く、友人・家族関係における感情経験は快・不快ともに多かった。しかし、中学生から大学生までを対象とした研究 2 では生活満足感に男女差はみられず、女子の方が友人関係における快感情経験が多く（大学生を除く）、大学女子に限っては学業における不快感情経験が少ない一方で、男子の方が家族関係における不快感情経験が少なく、中学男子に限っては学業における不快感情経験も少ないという限定的な性差が示されたのみであった。Diener, Suh, Lucas, & Smith（1999）は過去の研究を概観し、SWBには性差がみられないことが多く、もしみられる場合は女性の方が高いものの、他の変数を統制すれば容易に消えてしまう程度であるという傾向を報告している。ただし、性差がみられないのは女性の感情的反応性が快・不快に関わらず頻度・強度ともに高いことによるものであり、肯定的な影響（快感情）と否定的な影響（不快感情）が相殺されて結果的にSWBの水準が男性と同程度になると述べている。この論にしたがえば、研究 1 で女子の方が高いことが示され、研究 2 で性差がほとんど認められなかったことは、他の年代も含めたSWB研究全体からみればあり得る結果といえる。しかし、研究 1 において示された性差を僅かとみるべきか否かは議論の余地があろうし、研究 2 では情緒面における顕著な差がみられなかったことが認知面に反映された結果、全体的に性差がみられなかったと推察され、Diener et al.（1999）が主張するような女子の感情的反応性が快・不快に関わらず高いことによるものではない。本研究で示された傾向が青年期特有のものであるのか、あるいは重要領域に焦点を当てたことによるものであるのかは明らかでなく、他の年代におけるSWBの認知・情緒両側面の関連や感情的反応性の性差と比較検討するなど、知見を積み重ねていく必要があろう。

研究 2 で行った学校段階による各下位尺度得点差に関しては、中学・高校生に比べ大学生の学校生活満足感が際立って低い傾向が明らかとなった。また、各領域の快感情経験にも減少傾向がみられ、延いては全般的生活満足感も学校段階が上がるごとに低下していた。高等教育機関における学生相談室等に寄せられる相談件数は全国的に増加傾向

が続いており（日本学生相談学会研究委員会, 2007)、近年ではその原因を対人関係能力の低下に求める立場が有力となっている（島本・石井, 2006)。確かに、友人関係は青年期において特に重要性を増す対人関係であり、学校適応に与える影響も大きい。しかしながら、本研究では青年期全般を通して友人関係満足感は高く、学校段階差は認められなかった。また、中学女子が大学女子よりも友人関係における快感情経験が多い結果が示されたものの、男子に有意差は認められず、不快感情経験には男女とも学校段階差はみられなかった。すなわち、大学においては友人関係に問題を抱えていなくとも学校生活に満足できていない学生が一定数存在する可能性が窺える。本研究では、学業場面における快感情経験は学校段階が上がるにつれて減少する傾向も明らかとなっており、学習内容の専門化が関わることは予想されるものの、その他にも大学教育のシステムに特有の要因や学生から社会人への過渡期であることから生じる発達課題的な要因など、問題を抱えた者のみならず学生全体のSWBを底上げするためにも大学教育の現場において対人関係能力以外に検討すべき課題を探っていく必要があろう。

この他、友人関係領域においては満足感に学校段階差がみられなかったにも関わらず、女子に限っては快感情経験の減少がみられたこと、家族関係領域においては不快感情経験に学校段階差がみられず、中学生の快感情経験が最も多かったにも関わらず満足感は最も低かったのに対し、大学生の快感情経験が最も少なかったにも関わらず満足感は最も高かったこと、学業領域においては学校段階が上がるごとに快感情経験の減少や満足感の低下がみられたものの、不快感情経験は男子には増加傾向がみられたのに対し女子には減少傾向がみられたことなど、今後関連の予想される指標との関連を検討する際は、性差や発達差を考慮に入れることの有益性が示唆される。なお、本研究では青年期における横断的検討に留まっており、継時的な変化を捉えるための縦断研究や他の年代と比較するためのコーホート研究も進め、青年期におけるSWBの向上・低下・維持に影響する要因を探っていくことも肝要であろう。

文　献

Diener, E. (2000). Subjective well-being: The science of happiness and a proposal for a national index. *American Psychologist*, **55**, 34-43.

Diener, E., Emmons, R. A., Larson, R. J., & Griffin, S. (1985). The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.

Diener. E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, **125**, 276-302.

Elliot, A. J., Sheldon, K. M., & Church, M. A. (1997). Avoidance personal goals and subjective well-being. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 915-927.

榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究, **47**, 180-190.

古市裕一 (2004). 小・中学生の学校生活享受感情とその規定要因　岡山大学教育学部研究集録, **126**, 29-34.

古市裕一・玉木弘之 (1994). 学校生活の楽しさとその規定要因　岡山大学教育学部研究集録, **96**, 105-113.

Heller, D., Watson, D., & Ilies, R. (2004). The role of person versus situation in life satisfaction: A critical examination. *Psychological Bulletin*, **130**, 574-600.

Huebner, E. S. (1991). Initial development of the Students' Life Satisfaction. *School Psychology International*, **12**, 231-240.

Huebner, E. S. (1994). Preliminary development and validation of a multidimensional life satisfaction scale for children. *Psychological Assessment*, **6** , 149-158.

小高　恵 (2008). 青年の親への態度についての発達的変化―心理的離乳過程のモデルの提案―　太成学

院大学紀要, **10**, 31-48.

黒川　潤（1990）．円環モデルに基づく尺度（和訳版）の標準化の試み―家族満足度、親―青年期の子どものコミュニケーション、FACESⅢについて―　家族心理学研究, **4** , 71-82.

Lucas, R. E., Diener, E., & Suh, E.（1996）．Discriminant validity of well-being measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 616-628.

文部科学省（2009）．平成21年度学校基本調査速報〈http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2009/08/06/1282645_1.pdf〉

日本学生相談学会研究委員会（2007）．2006年度学生相談機関に関する調査報告　学生相談研究, **27**, 238-273.

落合良行・佐藤有耕（1996）．親子関係からみた心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究, **44**, 11-22.

小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人（2000）．一般感情尺度の作成　心理学研究, **71**, 241-246.

大久保智生（2005）．青年の学校への適応感とその規定要因―青年用適応感尺度の作成と学校別の検討―　教育心理学研究, **53**, 307-319.

大対香奈子・大竹恵子・松見淳子（2007）．学校適応アセスメントのための三水準モデル構築の試み　教育心理学研究, **55**, 135-151.

Pavot, W., Diener, E., Colvin, C. R., & Sandvik, E.（1991）．Further validation of the Satisfaction With Life Scale: Evidence for the cross-method convergence of well-being measures. *Journal of Personality Assessment*, **57**, 149-161.

Ryan, R. M., & Deci, E. L.（2001）．On happiness and human potentials: A review of research on hedonic and eudaimonic well-being. *Annual Review of Psychology*, **52**, 141-166.

Seligmen, M. E. P., & Csikszentmihalyi, M.（2000）．Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, **55**, 5 -14.

島井哲志（編）（2006）．ポジティブ心理学―21世紀の心理学の可能性　京都：ナカニシヤ出版.

島本好平・石井源信（2006）．大学生における日常生活スキル尺度の開発　教育心理学研究, **54**, 211-221.

総務庁青少年対策本部（2004）．世界の青年との比較からみた日本の青年―第 7 回世界青年意識調査報告書―〈http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth7/html/mokuji.html〉

Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A.（1988）．Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063-1070.